

開会の辞



総長、法学部教授
吉岡 知哉



国際センター長、法学部教授
松田 宏一郎

○平山 皆様、本日はお忙しい中、「立教大学日本語教育センターシンポジウム 2013」にご参加くださりまして、まことにありがとうございます。本日の司会進行役を務めさせていただきます、日本語教育センター員の平山紫帆と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、開会の辞をお二方から頂戴いたします。まず、立教大学総長 吉岡知哉先生、よろしくお願いいたします。

開会の辞(1)

○吉岡 皆さん、こんにちは。ようこそ立教大学においでくださいました。立教大学は今、1年中最も美しい季節ですので、ぜひ今日は夕方になったら、クリスマスツリーをご覧になって帰っていただければと思います。

本日のシンポジウムには、小出記念日本語教育研究会、それから日本総合学術学会も協賛してくださっております。ありがとうございます。立教大学の日本語教育センターはまだ発足して、そんなに時間がたっているわけではありませんけれども、立教大学にとってといいますか、立教に限らずですけれども、このグローバル化の動きの中で、やはり非常に重要な役割を今後果たしていくというふうに期待しております。

グローバル化というと、日本ではまず、英語教育が頭に浮かぶわけですがけれども、グローバル化のプロセスで、実は非常にはっきりと重要であるということが分かってきたというのが、母語の問題だろうと思います。母語とは何なのかとい



日本語教育センター員

平山 紫帆

うと、私は全然言語研究は分からないので母語が何であるかという定義は分からないのですが、自分の言語体験で考えると、ちゃんと学んだことがない言葉という気がいたします。例えば私たちが英語を学んだり、ほかのドイツ語とかフランス語を学ぶときは、文法を勉強したりして、こつこつと学び始めるわけですが、日本語というのは、きちんと学んだことがない。文法は習いましたけれども、その文法というのは、自分が使っている言語のプロセスとは随分違っていたという記憶があります。

学生時代に、ちょっと言語のことをかじったときに、時枝文法を少し読んで、それで言語過程説というのにもちょっと触れたことがあります。そうしていたら、フランスの、当時で言うとラングズー(Langues O')、今の INALCO の日本語教育というのは独自の教科書を使って勉強しているということ、その基礎に言語過程説の研究があったということを知りました。本当かどうか、私は全然分かりませんが、確かに私たちが小学校や中学校で、日本語の文法として学んだ文法というのは、言葉を学んでいくプロセスとはかなりかけ離れていたという気がいたします。

別の言い方をしますと、要するに母語というのは、ほかの言語を学ぶことによって、初めて母語として自覚され、恐らくは、もう一歩進んで、皆さんのように、日本語を教えるということで、日本語の構造というのが改めて自覚されるという、何かそういう鏡のような関係を含んでいる。それが恐らく日本語教育というものが持っている面白さなんだろうというふうに思います。

そういう意味で、グローバル化ということで、例えば外国から来た人が日本語を学ぶ、皆さん方が教えるというプラクティカルなことはもちろんとても大事なんですけど、それだけではなくて、日本語を教えるということ自体が、グローバル化のプロセスの中で持っている意味という、ちょっと入れ子のようなことというのが、これから恐らく、研究に生かしていくとか、次のステップの日本語

の言語教育のレベルを上げていくときに、役立っていくことではないかと思っております。今日のシンポジウムが皆さんの日本語の教えるということ、それから日本語について考えるということ、あるいは日本語で考えるということに、ますます役に立つように思っております。本日は本当にお集まりくださりましてどうもありがとうございます。(拍手)

○平山 吉岡先生、ありがとうございました。

次に、国際センター長、松田宏一郎先生よりご挨拶を頂戴いたします。松田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

開会の辞(2)

○松田 ただいまご紹介にあずかりました、立教大学国際センター長の松田と申します。本日は立教大学日本語教育センターシンポジウム 2013「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」というシンポジウムにお招きいただきまして、大変ありがとうございました。そしてお忙しい土曜日に、このシンポジウムにおいでいただいた皆さん、それから共催の小出記念日本語教育研究会および日本総合学会の皆様には大変、立教大学の日本語教育にご協力いただき、深く御礼申し上げます。

立教大学の国際センターというのは、どこの大学にも同じような役割を果たす部署がありますけれども、一番重要な仕事は、留学生のさまざまなケアでありますとか、あるいは逆に、こちらの学生を先方の大学に派遣するときのさまざまなケア、それからまた研究交流のサポート、そういったことを主として行っております。国際センターとして、日本語教育センターの先生方に変えていただいていることは、特に交換留学で立教に来ている外国人学生への、きめの細かい日本語教育です。毎年、いわゆる留学ビザで立教で学んでいる学生はだいたい500人ぐらいですけれども、そのうちの100人強ぐらいが、いわゆる交換留学で、それほど日本語が流暢ではでない、あるいは、場合によってはほとんど全然できないというレベルで立教大学で日本語を学びはじめます。多くの交換留学生は1年とか1年半ぐらいの期間学びます。

彼ら、彼女たちに、さまざまなレベルで非常に手厚い日本語教育を、日本語教育センターの先生方にはさせていただいていきます。レベルを9つに分け、プ

レイスメントテストや漢字のテストなど手づくりのものをやっただいており、非常に効果があがっておりますし、また、海外の協定校からは、立教では非常に手厚く日本語の授業をやっているというので、私が協定校を訪問したり、海外のコンファレンスでお会いするときにはいつも感謝の言葉をいただいております、たいへん誇らしい思いになることができます。そのほか、日本語のスピーチコンテストでありますとか、そして今後近いうちに、おそらく、集中的な日本語教育のプログラムの開発ということでも日本語教育センターと国際センターで協力して仕事をしていきたいと思っております。その意味で、日本語教育センターが、立教大学の1つの、海外に見せる教育の柱のようなものになっていって、前には英語の立教とときどきメディアに出たことがありますが、「日本語の立教」というのが海外で話題に出るようになると大変うれしく思います。

では、本日のシンポジウムが成功裏に進みますことをお祈り申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)